



Title	マニ教資料翻訳集成(2):ケルン・マニ・コーデックス
Author(s)	戸田, 聡
Citation	北海道大学文学研究科紀要 = Bulletin of the Graduate School of Letters, Hokkaido University, 155: 81 (左) - 105 (左)
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/bgsl.155.181
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/71277
Type	bulletin (article)
File Information	155_03_toda.pdf



[Instructions for use](#)

ケルン・マニ・コーデックス

戸 田 聡

翻訳序

本稿で訳出を目指すのは、マニ教研究における今や最重要史料の1つとみなされていると言えるケルン・マニ・コーデックス（以下 CMC）である。CMC（大きさが3.8 cm×4.5 cm と非常に小型で、しかも1ページ当たり23行の文字が記されている）は角質化した状態でケルン大学のパピルス・コレクションの中に所蔵されており、1969年5～6月に行なわれたページの最終的な分離作業の結果、中に記されていた本文が相当程度判読可能となったものであり、CMC と言えば通常その本文を指す。

この写本の存在を最初に世に知らしめた HENRICH & KOENEN (1970)¹以降、CMC に関する研究は種々存在するが、本稿の目的は CMC 自体に関する研究というよりむしろ、その本文を訳出して筆者（戸田）自身のマニ教研究のための資料としてこれを用いたいという点にあるので²、以下ここでは CMC に関して、本稿訳出の底本として用いる批判校訂版 (KOENEN & RÖMER (1988)。後出の略号・記号一覧を参照) の序言 (Vorwort. pp. XV-XXX) に記されている説明を摘記するにとどめる。

それによると、CMC 自体は書体学的に4世紀末～5世紀のものと同年代決

¹ 後出の略号・記号一覧を参照。

² したがって、同じく「マニ教資料翻訳集成」と題して以前に本紀要に公刊したリュコポリスのアレクサンドロスの著作（戸田聡「マニ教資料翻訳集成(1)：リュコポリスのアレクサンドロス『マニカイオスの教説に対して』」『北海道大学文学研究科紀要』146 (2015), 209-239 頁) の場合と同様、訳註は最小限にとどめることとする。

定可能な字体によって書かれており、出土地は不明ながらたぶん上エジプトだろうと思われる。本文は4世紀中葉に東アラム語からギリシア語に翻訳されたと思われ（この点についてはさらに後述を参照……戸田）、マニ（216-276頃）の伝記を含んでいる。この〈マニの伝記〉自体は、4世紀の最初の三分の一の時期に、様々な証言者の名で引用されている大小様々な部分（これら諸部分がCMCを構成していると言うことができる）を合わせた者（編纂者）によって編纂されたと思われ、そしてそれら諸部分はマニの自伝的言明からの引用（抜粋）を成している。今日CMCによって保存されているのは、（後掲の訳文から明らかなように）マニが幼少時（3～4歳）に洗礼者共同体（エルカサイ派の共同体だと通常考えられている）へと連れてこられて以降、そしてその洗礼者共同体の中での生活を経て、最終的にマニが共同体を離脱して企てた最初の宣教旅行の頃に至るまでの伝記、ということになる。

著作原語の問題について一言しておく、CMCの著作原語はアラム語だとする理解は既にHENRICHS & KOENEN（1970）に見られる³。そこで論拠として挙げられているのは、マニの在世当時にペルシア帝国の王都だったセレウキアークテシフォンがセム語の双数形を想起させる *αἱ πόλεις* という表現で表されていること、及び一般論として、マニは、中世ペルシア語で著した『シャープフラガン』以外はアラム語を使って著作したと考えられていること、である。本訳の底本KOENEN & RÖMER（1988）においてもこの理解が踏襲されているものと思われる。

これについては、確かにマニ自身はギリシア語が使えたとは考えにくいので、マニ自身に帰せられる部分（例えばエデッサへの手紙など）がアラム語を著作原語としていると考えるのは妥当だろうと思われるが、それ以外の部分、例えば、サルマイオス、バライエス、ティモテオスなど証言者の名前が挙げられている部分もまたアラム語を著作原語としているかどうかは、決して自明でないように筆者には思われる。例えば、上で引用した *αἱ πόλεις* という表現についての議論は、著作原語をアラム語だと断定するための論拠とし

³ HENRICHS & KOENEN (1970), pp. 104-105.

ては全く不十分である。しかも近年では、(マニ教研究とはやや異なる分野だが) 旧約聖書続編研究の中で、従来セム語を著作原語とすると考えられていた旧約続編文書のうちのいくつかについて、ギリシア語を著作原語とする可能性が論じられるようになってきている。これは、それら旧約続編文書のギリシア語(セム語的なギリシア語だと従来から理解されてきた)のセム語的色彩が、翻訳ゆえに生じた言わば生硬さだというよりむしろ、もともとそういう独特・特殊なギリシア語として書かれたがゆえの色彩だと理解されるべきだ、という見方が有力になりつつあるからである。この見方を当てはめるなら、CMCのギリシア語のセム語的特徴は(そういうものが見られるとしても)、それだけでは著作原語をセム語だと断定する決定的な論拠にはなりえないことになるのではないか(そのような論拠が多数見つかるなら話は変わってくるかもしれないのだが)。

ということで、本稿の暫定的な立場として、CMCの著作原語は(マニ自身に帰せられる部分を除いては)セム語かギリシア語か不明である、と言っておきたい。

略号・記号一覧

- ・ HENRICHS & KOENEN (1970) = A. HENRICHS & L. KOENEN, "Ein griechischer Mani-Codex (P. Colon. inv. nr. 4780; vgl. Tafeln IV-VI)", *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 5 (1970), pp. 97-216
- ・ KOENEN & RÖMER (1988) = L. KOENEN & C. RÖMER (eds.), *Der Kölner Mani-Kodex. Über das Werden seines Leibes*. Kritische Edition aufgrund der von A. Henrichs und L. Koenen besorgten Erstedition (Papyrologica Coloniensia, 14), Opladen: Westdeutscher Verlag, 1988
- ・ 「|」または「(○行目)」は行の変わり目を示す。但し、日本語とギリシア語の語順の違い等々のゆえに、つねに行の変わり目が表示できるわけでは必ずしもなく、むしろ表示できないケースのほうが多い。
- ・ 訳文中、() (上に記した(○行目)のケースを除く)は校訂版本文に見られる校訂者註を訳した部分を示す。

・ [] は訳者（戸田）による補いを示す。

なお校訂本文には、読みの不確かな部分を示す記号や校訂者による補いなど、この種の出土資料の校訂の際によく見られる多数の補助記号等が付されているが、これら補助記号等を以下の訳文でそのまま再現することは、日本語とギリシア語の間の様々な違いのゆえに事実上不可能であり、かつ煩瑣極まると言わざるをえない。よって、以下の訳文ではそれら補助記号等は、上記凡例で記したものを除いて一切省略し、校訂版で本文として印刷されているものの最大限、つまり校訂者による補い・推測などを含む文章、を訳出することとした。本文の読みの確かさ等々を確認したい読者は自らで校訂本文を参照されたい。

ケルン・マニ・コーデックス

彼の身体^{みあ}の御生れについて

断片 1 （現存する最初のページに先だつフォリオの断片が7行分を示しており、その中に以下の言葉が読まれるべきである）

（3行目）家の者たち…… | （4行目）預言者…… [そして] | 救い主……（これらのあと約39行が失われている）

1 頁 （冒頭の7行分が残っており、以下の部分が判読可能）（5行目）同じ…… | 私に彼自身……

2 頁 （1行分の痕跡のあとに以下が続いている）…… | （2行目）「少しずつ | ……不敬な…… | あなたに私は示した…… | 多くのものから。あなたには、その奥義を見ることは寛大にもかつ目に極めて鮮やかな仕方で許されている」。そしてその時、御使いは……から見えなくなった。

3 頁 （1行分の末尾のあとに）…… | （2行目）私の保護を委ねられた〈聖性の諸力 [或いは「聖性の軍勢」]〉と御使いたちとの強さによって、私は守

られた。また彼らは（8行目）私を、小さな極めて短い——私がそれらを耐えることができた [ことによってわかる] ように——諸々の幻や諸々のしるしによって育ててくれた。（13行目）つまり或る時、稲光のように……。

4頁（極小の痕跡のあと）（2行目）私はこのことに全く確固として気づいた。そして彼は、患難の中に在ったこの力についても、私を守ってくれた。（7行目）彼が私の若年のその時期全体を通じて私に示した諸々の幻は非常に多く、諸々の光景は非常に大きい。そして私自身は沈黙の中にとどまった、もし……でなくとも（14行目）（次の行の最後の字以外は何も残っていない）

5頁（現存する第2行の末尾から次のように読める）……この者の知恵や巧みさと共に [私は] 彼らの間を巡り歩いて、休息を抑制して、不正を行なわないで、何も損なわないで、また洗礼者たちの法に従わないで、彼らと同じように語らうことをしないで……。 （13行目）

禁欲者サルマイオス

6頁（全く失われた7行分のあと、また、その次の行の最初のあと、次のように読める）……彼に。しかしあなたは庭から野菜を取ってくるな、また、自分の用途のために木を運ぶな。（7行目）

そしてかの洗礼者は私に強いた、曰く、（9行目）「立って私と一緒に、木がある場所に来い、そして受け取って（12行目）運べ」。我々がとあるヤシのところへと出かけていくと、その洗礼者は上って（14行目）……（失われた10行分のあと、その同じヤシがマニに話しかける）……**7頁**……「もしあなたが我々から苦難を締め出すなら、（4行目）あなたは殺人者と一緒には滅びないだろう」。その時、私に対してかの洗礼者は恐れに捕えられ、狼狽しつつそこから降りて来て私の足元にひれ伏した、曰く、（11行目）「えも言われぬこの奥義があなたのもとに在ることを私は知りませんでした。（14行目）どこからあなたにこの……が啓示されたのでしょうか」。……（失われた7行分のあとマニは洗礼者に答える）**8頁**（1行目）「ヤシがあなたにこのことを

語った時、どうしてあなたは大きいに恐れたのですか、そして顔色を変えたのですか。あらゆる植物から語りかけられる者は、何倍（7行目）揺り動かされるでしょうか。|そこで彼は私のゆえに驚きによって捕えられて愕然とした。彼は私に行った、「この奥義を保て、誰にも言うな、誰かが妬んであなたを殺すことのないために」。(15行目)

……そこで……（8行分が全く失われている）**9頁**（1行目）……私が庭から野菜を取らず、むしろ敬虔の言葉において彼ら指導者たちに願っているのを目にした彼らの法の指導者たちの一人は、私に向かって言った。彼は言った。「お前はなぜ庭から野菜を取らず、(12行目)むしろ敬虔の分において|私に願うのか」。そしてその洗礼者が私に語ったあと、……（失われた7行分のあと、同じ小話が続く）**10頁**（1行目）そしてそれは、嘆きながら、人間の顔のように、あたかも子どものように、溶けた。そして、わざわざだ、わざわざだ、彼が手の中に持つに至った鎌によって切られた場所から、血が流れ落ちた。そして（9行目）また、それらは彼らの打擲ゆえに人間の声で叫んだ。するとその洗礼者は、(12行目)自分が目にしたことどもに対して非常に動揺し、やって来て私の前にひざまずいた。そこで、誰かが私を……[した]時には……。

[証言者名不詳]

（4行分が失われており、その中で、別の典拠から汲まれた抜粋が始まっていると我々は推測している。そのあとマニが物語っている）……（21行目）……[生後]第4年に至るまで、私の体の**11頁**子どもの間。(3行目)それから私は洗礼者たちの家に入り込み[すなわち加入し]、その中で私は、体の若さの間、極めて強い諸力[或いは「軍勢」]と光の御使いたちとの強さによって守られて育った。それら諸力[或いは「軍勢」]は温熱の(?)イエスから保護のために戒めを帯びていたのだ。それから直ちに彼ら……（16行目）……（7行分が失われている）(23行目)……水の**12頁**泉から私に人間の形が現れ、私が罪を犯さないよう、彼に対して労苦をもたらしさないよう、手によって休息を指し示した。

このようにして第4年から、私が自分の体の盛期に至るまで、極めて清浄な御使いたちと聖性の諸力〔或いは「軍勢」〕との手の中で、私は気づかれずに見守られていた。(16行目)

【証言者名不詳】

(6行分が全く湮滅しており、その最初の行に他の典拠の名が示されていたことは確実である。8行目の途中から文が再認可能である)…… 13頁(2行目)別の時に、相^{シュジュボス}棒のような声が私と語らった、曰く、「君の力を強くせよ、心を強めよ、そして、君に啓示されたすべてのことを受け入れよ〔或いは「待望せよ」〕。(10行目)そして再び同じことを言った、「力を強くせよ、(12行目)君の心を確立せよ、そして、君の上へと来るすべてのことを引き受けよ」。(15行目)その時私はかがみこんだ…… | 声…… (7行分のあと我々は次のように読む)「… 14頁…偉大な父たちによって我々は押し出され〔てやって来〕たのだ」。

教師バライエス⁴

(4行目)我が主は次のように言っていた。| 今日、王の役に立つ仔馬が馬引きの力によって、王が名誉と栄誉のうちにそれに座して自らの意志を遂行するべく、王の乗り物となるように、それと同じ仕方で体は育てられた(15行目)……善い | … (失われた6行分のあとに次のものが続いている) 15頁(1行目)場所…… | 王の休息へと。そして、着る者のために服が整えられた。一方で、海から宝物をすなごるために、最良の舵手のために船が装備され、(10行目)他方で、知性の良い評判のために、聖所が創られ、そして(12行

⁴ CMCから明らかなように、バライエスはマニ教徒たちの最も重要な護教家だろう。4世紀の初頭に位置づけられるべき人物だろう。マニの死後にいくつか説教を行なっている(ZPE 19(1975), p. 80 n. 80*, 及びS.N.C. LIEU, JAC 26(1983), p. 196の、大呪詛式文2, 37への註釈、を参照)。「教師」と称されるのは、教会の長(マニ及びその後継者)に次いで最も高い教会職であり、教師たちは12人から成る一団を成していた。[以上はKOENEN & RÖMER(1988), p. 9の註1の訳出。]

目) 一方で、極めて神聖なる神殿が、彼の知恵の啓示のために創られた。他方で、満たされたのは、……(15行目) 子孫 [或いは「利子」] ……(7行分が湮滅している) …… **16頁** (1行目) [それは、] 彼 [すなわちマニ] が体の中に住まって、有力者たちから奴隷とされた者たちを [離すため]、(4行目) そして叛徒たちに対する服従と、管理者たちの権威とから、彼らの四肢を贖って自由にするため、一方で、彼自身の知識を通じて真理を明らかにするため、他方で、閉じ込められた者たちのために彼において扉を開くため、(15行目) そして一方で、彼を通じてその者たちに ^{エウゾーイアー} 良き生を得させるため、……(7行分が失われている) ……(23行目) ……あらゆる教 **17頁** (1行目) えとあらゆる法から……、そして他方で、彼がこの世代の使徒職の長にして ^{バラクレートス} 弁護者となつて、無知の魂たちを自由にするために、である。

そこで、私の体がついに完成した時に、(11行目) 私の顔のかの鏡像——見目麗しく極めて偉大な——が直ちに私の前に舞い降りて現れた。……(失われた7行分の中では、「そして再び彼 [マニ] は言った」或いはそれに類するものがあつたらうと推測され、そしてそのあとで次のように論題が進んでいる) (23行目) 「私が [自らの生涯の] 24年を **18頁** (1行目) 始めた時、すなわち、ペルシス [或いは「ペルシア」] の王ダリアルダクサル [すなわちアルダシール] が都市ハトラを服属させた年、また、彼の息子である王サポールース [すなわちシャープール] が極めて偉大なる頭環を帯びた年、ファルムーティ月 [グレゴリオ暦の4～5月に当たる]、陰暦の第8日 [すなわち240年4月17/18日] に、極めて幸いなる主が私を憐れみ、ご自身の恵みの中へと [私を] 召し、そして、大いなる栄光の中に在る我が ^{シユジュゴス} 相棒を私に遣わし、……(8行分が湮滅している) **19頁** (2行目) [その方は、] 我らの父と、遙かなる最初の善い右手とから来るところの、あらゆる最良の助言を、覚えていて知らしめる方 [である]」。

そして再び彼は次のように言った、「我が父が同意して、教義を語る者たちの誤謬から私が解放されるべく、憐れみと同情を私の上へともたらし、(14行目) ご自身の極めて多くの顕現を通じて顧みを私の上へともたらし、我が ^{シユジュゴス} 相棒を私に遣わした時……(5行分が湮滅している) (23行目) ……そして

彼は私に **20 頁** 最良の希望をもたらし、忍耐づよい者たちに贖いをもたらし、かつ、極めて真実なる保証・見解と、我らの父からの按手とをもたらした。(7 行目) そこで彼は、到着した時に | 私を解き放って分け隔て、私が育てられた際の基準だったかの法の中から [私を] 引き抜いた。このようにして彼は私を召して選び出し、これらの中から引っ張って分離し、そして私を一つの側へと引き出した (18 行目) ……。

(全く失われた 6 行分のあとに次のように読める) **21 頁** (1 行目) ……「私は、そして私の体は、何者であるか、どのような仕方で私は来たのか、この世への私の到来はどのように起こったのか、(7 行目) 卓越という点で極めて貴顕である者たちの中で私は何者になるのか、或いはどのような女 [或いは「助産婦」?] ゆえに生へと引き出されて、この肉に従う形で私は生み出されたのか、(15 行目) 誰の種から生まれてきたのか、そして…… (7 行後に次のように読める) **22 頁** (1 行目) ……そしてどのように……生み出されたのか⁵、そして (3 行目) 高みにおられる我が父はどのような方なのか、或いはどのような仕方で彼から分離して私は、彼の見解に従って遣わされたのか、また、どのような戒め及び保証を彼は私に賜ったのか、私がこの道具 [たる肉体] を着る前に、(11 行目) この唾棄すべきような肉の中で私がさ迷う前に、また私が肉の醜態と流儀とを着る前に、そして……彼自身、眠らない我が相^{シュジュゴス}棒でありつつ、(18 行目) …… (18 行目のあと 5 行が湮滅している) **23 頁** (1 行目) ……えも言われぬことども、諸々の思念、我が父の種々の横溢、そして私について、私は何者であって、確固たる我が相^{シュジュゴス}棒は一体何者なのか、(7 行目) さらにまた、あらゆる諸世界の魂である我が魂について、或いはそれ自体は何者なのか、(11 行目) 或いはどのようにして生じたのか。また、これらに加えて彼は私に、果てしない諸々の高みをも測りがたい諸々の深みをも示した。(15 行目) そして彼は私に、……すべてを示した」。 (失われた 7 行分のあとに次のことを我々は読む)

…… **24 頁** (1 行目) 一方で、……

⁵ KOENEN & RÖMER (1988), p. 14 l. 2 の γεγένηται は γεγένηται (<γεννάω) と読んだ。

極めて確かである彼を……。

そして私は彼を「或いは「それを」？」敬虔に受け取り、
自分の所有物として獲得した。(6行目)

私は、彼が自分のものであって
現にそうであると、また、善い有用な
助言者であると、信じた。(10行目)

一方で、私は彼を認識したのであり、そして
私は、自分がそこから分かれたその当の
者なのだ、と理解した。(13行目)

他方で私は、私は全く等しいので
あって、その者自身なのだ、
と証言した。(16行目)

……(またもや8行分が湮滅している) **25頁** (1行目) 彼に……。

彼はまた再び次のように言った。「非常な手管と技巧とを以て、その法の中で私は出し抜き[すなわちうまく立ち回り]、私のもとにあるものが一体何者なのか(彼のことを、非常に長かったその期間に私は、誰にも何も啓示しなかった)誰も気づかないまま、自分自身の賢慮の中でこの希望を保ち続けた。(14行目)却って、それらにほぼ等しいものも……ない……(16行目)肉的な……(6行分が失われ、その末尾に次のものがあると我々は予想する)彼らに何も私は啓示 **26頁**(1行目)しなかった——生じたことのうちの何も、また、[今後]生じるであろうことのうちの何も、また私が知ったことが何かも、或いは私が受け取ったものが何であるかも」。

教師たちが語る

「そこで、えも言われぬ極めて大いなるこれら諸々のことを、全く評判が良く全く幸福なその者が私に明らかにした時、彼は私に向かって語り始めた。『私が君に啓示したこの奥義を……すべての人々に……提示せよ、そして……啓示すること……』。(54行分がほぼ全く湮滅しており、その中の8行分は26頁に、46行分は27頁と28頁のフォリオに書かれた)

(マニが語る) **28 頁** (23 行目)「毒麦と地の諸々の果実とを **29 頁** (1 行目) 切る鎌を通じて、すべての叛徒たちの枝を切り落とすために。唯一、真理だけが讃えられ、支配し、……とほぼ等しく……高みの…… (8 行分の冒頭が現存する。第 14 行には接続詞 ὅτε[が左側欄外に (in ecthesi) 記されている。そして続く 6 行分は全く湮滅している) **30 頁** (1 行目) 肉によればつながるそれらの者たちに……, それだけでなくこのような仕方にもよって私は、少しずつ、自分が育てられた際の基準であるかの法の中から自分自身を切り離し、……奥義……度外れに驚嘆し……大勢…… (7 行分の末尾のあとで 6 行分が全く失われている) **31 頁** (1 行目) 大勢に、他方で私は孤独である。| つまり一方で、これらのものは富んでおり [或いは「彼はこれらの点で富んでおり」], | 他方で、私は貧窮している。そこで、どうして私は、他のすべての人々に反してひとりでありながら、誤謬の中に捕えられている大勢の只中でこの奥義を啓示することができるだろうか。…… (10 行目) 王たちや高位の役人たちに対して…… (12 行目) ……民族……語らうために (?) ……実践によって……。つまり一方で私は……であり貧窮者であり……孤独であり…… (20 行目) (失われた 3 行分のあとで次のものが続いている) …… **32 頁** (1 行目) 非常に多くの助け手が共にいるのもあるところの者……」。(3 行目)

「私がこれらのことを考え、心で考慮していると、極めて栄光ある我が相^{シユジュゴス}棒がその場で私の真向かいに立って現れ、私に向かって語った。『……君は次のように言った。……王たちに……この奥義が啓示されること……。善い助言者……助言……たまたま私が [そう] である……意志 [或いは「相談」?] ……助言者。(19 行目) 良く……啓示され…… (2 行分が失われている) **33 頁** (1 行目) そしてこのこと自体のゆえに君は生まれたのだ。そこで君は、私が君に与えたすべてを説明せよ、他方で、私はいつでも君の同盟者にして守護者であるだろう』。

ティモテオス

(マニが語る)(8 行目)「これら諸々の時期に……そして……奥義……。(12

行目) 一方でかつて…… (4行分の冒頭 — その中には「光の」という語が見える — のあと、また全く失われた5行分のあと、次のように読める) (21行目) …… **34頁** (1行目) 光の父たちの……、そしてそれら舟の中で起こることすべてをあなたがたは私に啓示した。他方で、彼はまた再び、柱のふところと、父たちと、この[柱]自体の中に隠れている極めて強壯な強さを、開陳した。そして、……の高み……この……を彼は示した……。

(4行分の末尾が現存しており、それらのあと5行分が全く失われている。マニは語りを次のように続ける) …… **35頁** (1行目) 「選ばれること、そして私に現れること [を……されておき(?)], [教会は(?)] それの教師たちや司教たちや選ばれた者たちや洗礼志願者たちの中で用意され完成され、また食卓や敬虔の行為や極めて偉大なる助け手たちや今後生まれてくるすべての者たちの中で [用意され完成され(?)], その結果私のこの教会が啓示されるのであり、そして……かの相^{シュジュゴス}棒自身には…… (3行分が湮滅している)。

【証言者名不詳】

(失われた20行目の中で、典拠はマニの言葉を引き合いに出し始めている) (21行目) 「極めて真実 **36頁** (1行目) なるえも言われぬ [教え(?)] を彼は私に啓示し、彼の前でひざまずいて (4行目) 私は言った、『私があなたから願い求めているこれらのことは私に与えられるのでしょうか、そしていかなる時にも、隠されないまま私と共にとどまるのでしょうか、却って私の手を通じてはっきりと明らかにされ、人々のすべての目に明らかにされるのでしょうか。またさらに、教会が増大するために、私はあなたから諸々のしるしのすべての力を願い求めます、それは、私が自分の両手によってそれらしるしを實踐し、(19行目) ……いかなる所でもいかなる村々や町々でも……ためであり、また、過てる者たちに私が **37頁** (1行目) 赦しを遣わすためであり、また、再び知恵に従って誰も私を負かさないためであり、また、私が無病で無危険であるためであり、また、勝者たちの魂が世から出て、人々のすべての目によって見られるためなのです』。…… (13行分の冒頭が続いて

おり、そのうちの4行分は左側欄外に記されており、また11行目冒頭には「同様にまた、(～する)ため」、15行目冒頭には「また再び」、19行目冒頭には「また、(～する)ため」、23行目冒頭には「そして」とある。さらに、17行目では「私を栄光が」と読める(23行目)『そしてそもそも私が、患難或いは迫害によって取り**38頁**(1行目)囲まれる場合には、敵たちの前から隠されるためなのです』。

「その時、かの極めて栄光ある者 [=「相^{シユジュゴス}棒」だと解釈して、以下訳出する]が私に向かって言った、『君が私から願い求めたこれら贈り物を、一方で、それらのうちの一つは幾人かの者たちに、……兄弟たちに……与えられ、……他方で幾人かの者たちに、……世代に……それらは啓示された……一方で……目によって……見られる……諸々の贈り物が……**39頁**(1行目)ふさわしさに応じて、君[という存在]が啓示されたその当の世代において、諸々の罪に対する赦しを、罪を犯して君から悔い改めを受け取り聖性を信じるかの人々に君が遣わすためであり⁶、君が解き放って、諸々の過ちや告発に対する赦しを君の選び[の民(?)]に遣わすためであり、さらにまた……罪を犯し……悔い改め……。 (16行目)そして再び……。』(続く7行分の冒頭のうちで20行目「教義」が現存している。全く失われたもう1行分のあとで本文は次のように続いている)**40頁**(1行目)『そして再び、もしも君が苦難を受けて私に呼びかけるなら、私は、君のかたわらに立っているのが見いだされるだろう、いかなる患難や危険においても君の保護者となるだろう。君が私に願ったこれらのしるしは私において知られるだろう、その結果それらは極めて明らかなものとして君に啓示されもするだろう。というのも私は、

⁶ 「諸々の罪に対する赦しを……遣わすためであり」の原文は *ὅπως* という接続詞によって導かれる一つの従属節(正確には、目的を表す従属節)を成しているが、ここで、通常のギリシア語文であればこの接続詞 *ὅπως* は節の冒頭に出てくるべきところだが、この文章では節の冒頭でなく節の動詞活用形の直前に出てきている。これと同様に、KOENEN & RÖMER (1988), p. 221.9 のギリシア語文 *ἡ ἐκκλησία ἴν' αὖξηται* は通常のギリシア語の語順なら *ἴν' ἡ ἐκκλησία αὖξηται* となるべきところだが、やはり接続詞が節の冒頭でなく節の動詞活用形の直前に出てきている。

私の手を通じてすべての者を示すだろうから。そして私は君にとって鏡像のようになるだろう……私が……（15行目）その結果、君の中で知恵が立ち昇ることになり、また君は病気から解放されることになるのだ。諸々のしるしは……を通じて君に提示され、そして（20行目）……（続く3行分の末尾が現存している。そして4行目は全く湮滅している）（23行目）…… **41頁**（1行目）嘘に対して抵抗する諸々のものを彼らへと……。というのも、真理の諸々のしるしを通じて虚偽の諸々のしるしは無効にされたからである』（6行目）そして極めて栄光ある者は、私に向かってこれらのことを語り、私を力づけ、私を自分の使徒職へと励ましたのち、見えなくなった』（12行目）

「そこで、……啓示……した時、……時、……とほぼ等しく……（続く3行分は失われている） **42頁**（1行目）それから葡萄の若枝を、その取り木を増やすために取ること。それは、このようにして、極めて良い一つの種からの一本の葡萄の木から——とはいうものの、そもそもその葡萄の木が、多くを産することが可能な充分な最良の土地から育つことが可能なら——然り、この葡萄の木から多くの葡萄の木の……が生じるためである……（9行分の末尾が続いており、その中で17～18行目では「……我が父が……取って……」ということが記されているようである）。

（20行目からは、同じ典拠から汲まれた別のセクションが始まっている。ページの最後の行は全く湮滅している。他方、続くページの冒頭には次のものが現存している）…… **43頁**（1行目）「高みと深みと休息と懲らしめとを……。そして彼は私に、世に知られずに来た⁷ 諸々の奥義——いかなる人もこれらを見ることも聞くことも許されていない——を啓示した。（8行目）

「そこで、彼の……の中で私の目に見えたすべてのことを私が吟味した時、そして……（11行分の冒頭が続いており、その中で19行目の冒頭は「見て」と読むことができるかも）…… **44頁**（1行目）すべての人々に与えられるの

⁷ 「知られずに来た」は λεληθότα (λανθάνω の完了能動分詞) の訳だが、この例に限らず、CMC では動詞が完了時制の形で使われることが一般的に他の文章に比べて多いという印象がある。

でなく……。その時直ちに私は、自分が育てられた際の基準だったかの教義の秩序から自分自身を切り離し、そして私とその教義から出て行く時が到来するまで、彼らの中で、異質な者や孤独な者にほとんど等しい者となった。……」（13～19行目の末尾と装飾の線が続いており、それらは抜粋が20行目で終わったことを証明している）。

45 頁

教師バライエス⁸

（1行目）そこで、おお兄弟たちよ、知りなさい、|そしてここで記されたすべてのことを理解しなさい——我々が彼から教えられたように、この世代におけるこの使徒職が遣わされた際のその仕方についても、（9行目）さらにまた、彼の体についても……（12～21行目の最初の字と時折2番目の字が現存しており、その中の最後 [の字] は左側欄外に記されている。22～23行目は全く失われている）**46 頁**（1行目）^{バラクレトス} 弁護者の霊のこの使徒職 [について (?)] ……、また、変えられて、[次のように] 言う [ためにである]。すなわち、この者たちだけが彼らの教師の^{さら}攫われを自慢のために書いたのだ、と。（8行目）そして再び、彼は自分の体の誕生についても書き記したのであり、同様にまた、かの……（12～20行目の最後の数文字以外には何も現存しない。21～23行目は全く失われている）**47 頁**（1行目）罪を犯す。つまり確かに、そうしたい者は聞くがよい、そして（3行目）注意するがよい——先祖の父たちの各々一人が、自分が現れたその当の世代に自ら選んで集めたところの自分の選び [の民] に、自分の啓示を示したように、そして書き記して後生の人々に遺したように。そして一方で、彼は（14行目）自分の^{さら}攫われについて述べたのであり、他方で、彼らは外で（16行目）語ったのであり、……（19～21行目の冒頭のあと、また全く失われた2行分のあと、バライエスは

⁸ [この] 典拠の名 [すなわち「バライエス」という名前] は頁の頭の部分、すなわち書物の題がしばしば現れる場所に記されている。[以上は KOENEN & RÖMER (1988), p. 28 の異読一覧に記された関連部分の訳出。]

使徒たちの使徒職について論じることを続けている) **48 頁** (1 行目) 書くこと、そして証明すること……そののち、自分たちの教師たちを、また真理と、彼らに啓示された希望とを、賞賛し褒めそやすこと。(8 行目) そこで、このようにして各々一人は、自分の使徒職の道行きと経巡りとに従って、自分が見たとおりに、備忘のために語りかつ書き記したのである——さらにまた、自分の攫^{さら}われについて。(16 行目)

こうして第 1 の者としてアダムが極めて明らかに自分の黙示録[或いは「啓示」]の中で語った。

私は一人の御使いを目にした。……啓示……あなたの輝かしい **49 頁**
(1 行目) 顔の前で、私の知らない者……。

それから (3 行目) 彼は彼に言った、

「私はバルサモス、光の極めて大いなる御使いである。それゆえあなたは、受け取ったなら、私があなたに掲示するこれらのことを書きなさい、虫を寄せつけず朽ちず極めて清浄な紙葉^{カルテース}に」。

さらに、彼が幻の中で彼に啓示した他のことどもは極めて多いのであって、というのも、彼をめぐる栄光は極めて大いなるものだったからである。(15 行目) そしてまた彼は、極めて大いなる諸力 [或いは「軍勢」] や、司令官たちや御使いたちを目にした…… (19~22 行目の冒頭以外には何も現存していない。23 行目は全く失われている) …… **50 頁** (1 行目) アダムは……そして創造の御使いたちやあらゆる諸力 [或いは「軍勢」] を上回る者となった。(5 行目) そしてまた、これらとほぼ等しい他の多くのことは彼の諸著作の中にある。(8 行目)

そしてまた同様に、彼の息子セーテール [或いは「セト」(?)] が自分の黙示録 [或いは「啓示」] の中で次のように書いた、曰く、

私は自分の目を開けて、自分の顔の前に一人の御使い——その輝きを私は描くことができなかつた——を目にした……別の……諸々の稲光……私に (20 行目) ……これら **51 頁** (1 行目) を私が耳にした時、私の心は喜んだ、そして思慮は変わり、私は極めて大いなる御使いたちの一人のようになった。かの御使いは自分の手を私の右手の上に置いて、私

が生まれたその当の世から私を押し出して、そして非常に極めて大いなる別の場所へと連れ去った。そして私は自分の後ろのほうから、自分たちの世に在るかの御使いたち——私は彼らをあとに残してきた——から、極めて大きな騒音 [が生じるの] を聞いた。そして……見て……人…… (21~22 行目の冒頭が続いている)

そして、これとほぼ等しい多くの **52 頁** (1 行目) ことが彼の諸著作の中で語られた。また、自分がかの御使いによって一つの世界から [別の] 世界へとどのようにして攫われたか、また、偉大さの極めて大いなる奥義を彼が彼にどのようにして啓示したか [、が語られた]。

再び、エノス [または「エノシュ」] の黙示録 [或いは「啓示」] の中で彼は次のように言っている。(10 行目)

第 3 年の第 10 月に (12 行目) 私は荒廃した地の中へと散歩に出て行って、(14 行目) 思慮に従って天地について、またすべての業や事物について、どういう理法によって何を通じてまた誰の意志によってそれらが生じたのかを考えていた。(21 行目) ……死 **53 頁** (1 行目) の……。そして彼は極めて大いなる静寂と共に [私を] 攫い、私の心は重くなり、私の四肢はみな震え、私の背中の椎骨は激しさによって動かされ、そして私の両足は節々の骨の上に立っていなかった。(11 行目) 私は立ち去って多くの平原へと赴き、そしてそこで極めて高い山々を見た。すると霊が私を攫い、静かな力によって私を山の中へと運んでいった。そしてそこで (17 行目) 多くの大いなる光景が私に啓示された。

再び彼は言った、

その御使いは……そして私を北極地方へと **54 頁** (1 行目) 運んでいき、そこで私は、非常に大きな山々と御使いたちと多くの場所とを目にした。そして彼は私と語らって言った、「卓越の点で最も強き方が私をあなたへと遣わした。それは、私があなたに、あなたが思いめぐらしたえも言われぬことどもを啓示するためであり、なぜならば、あなたは真理へと選び出されたからだ。そこで、隠されたこれらすべてのことを (13 行目) あなたは銅製の書き板に書きなさい、そして砂漠の地面の中に埋めなさい

い。あなたは自分の書くすべてのことを極めてはっきりと書きなさい。というのも、私の、永遠に終わらないこの啓示は、すべての……兄弟たちに啓示される用意ができているからだ」。

これらの者たちにふさわしい他の多くの **55 頁**（1 行目）ことが、彼の攫われと啓示とについて教えており、彼の諸著作の中にある。つまり彼は、自分が聞きかつ見たすべてのことを、真理の霊の後生の者たちすべてに遺したのである。（10 行目）

そしてまた同様に、セムは自分の黙示録 [或いは「啓示」] の中でこのように言った。（13 行目）

私はすべての業について、どのような仕方ですれらが生じたのかと考えた。そして（16 行目）私が熟考していると、生ける霊が突然私を攫い、非常な力で私を運んでいき、極めて高い山の頂上に立たせ、私に向かって言った、曰く、「…… **56 頁**（1 行目）栄光を名誉の極めて大いなる王に与えよ」。

また再び彼は言った、

一方で、静寂と共に諸々の扉が開かれ、（6 行目）他方でまた、風によって雲が分かれた。そして私は、極めて上なる高みから栄光ある客間 [或いは「玉座の間」(?)] と、その客間の担当である極めて大いなる御使いとを見た。彼の顔のアイデアの^{エイコン}形は、太陽の輝く光沢よりむしろ、極めて美しく優美だった——さらにまた、稲光よりも。太陽の……とほぼ等しく……。 **57 頁**（1 行目）ファルムーティ月の花で編まれた花冠に多色の……。そして（4 行目）その時私の顔の姿が変わり、（6 行目）その結果 [私は] 地面に倒れた。そして一方で、私の背中の椎骨は激しく揺さぶられ、他方で、私の両足は節々の骨の上に立っていなかった。その客間 [或いは「玉座の間」(?)] から呼ぶ声が私にかがみ込み、私のところにやって来て右手をつかみ、[私を] 起こした。そして私の顔に対して生命のあえぎ息が吹きつけて、力と栄光との追加を私にもたらしした。

そしてまた、これとほぼ同等な他の極めて多くのことが彼の著作の中に **58 頁**（1 行目）ある——また、御使いたちが、どういったことどもを備忘のた

めに記すよう言って、それらを彼に啓示したか、ということもまた [彼の著作の中にある]。(5行目)

また再び、エノクが自分の黙示録 [或いは「啓示」] の中でこのように言った。

私が(9行目)義人エノクである。不敬な者たちの口から出てくる中傷を私が聞いたゆえに、私には、大きな痛みと、自分の両目から涙の注ぎとがある。

そして彼は言った(17行目),

私の目の中に涙があり、口の中に祈願がある時に、私は7人の御使いたちが天から下ってきて私のところに現れるのを目にした。そして彼らを**59頁**(1行目)見て私は恐れによって動揺し、その結果私の両膝は互いにぶつかってがくがくした。(4行目)

また再び彼は次のように言った。 |

ミカエルという名の、御使いの一人が私に言った、「あなたへと私が遣わされたのはこのことのため、すなわち我々があなたにすべての業を示すため、また我々があなたに、敬虔な者たちの地と不敬な者たちの地とを啓示し、そして不法な者たちに対する刑罰の場所がどのようなものであるかを啓示するためである」。(16行目)

そして再び彼は言う、 |

それらの者たちは私を風の戦車に座らせ、諸天の果てへと運んでいった。そして我々は諸々の世界を、死の世界も闇の**60頁**(1行目)世界も火の世界も超えていった。そしてこれらののち彼らは極めて豊かな世界——この世界は、一方で、光によって極めて評判が良く、他方で、私が見た諸々の発光体 [或いは「星々」] よりも一層、極めて美しかった——へと導き入れた。

そして彼はすべてを目にし、御使いたちを吟味し、彼らが彼に何か言ったならば、[それを]自分の著作に刻みつけた。(13行目)

我々が知っているごとく使徒パウロが第三の天まで攫われたように、同様に彼はガラテヤの信徒への手紙の中で言っている(ガラテヤ1:1)。

人々からでも人によってでもなく、イエス・キリストと、彼を死者たちの中からよみがえらせた父なる神とによる使徒パウロが [……]

そして **61 頁** (1 行目) コリントの信徒への手紙二の中で彼は言っている (Ⅱコリント 12:1-5)。

私は再び主の啓示と幻とに来るだろう。私はキリストにあつて或る人を知っている — 体の中でか、体の外でか、私は知らない、神がご存じである —、すなわちこのような人が、天へと攫われて、人間にとって語ることが許されていない語られざる言葉を聞いたのである。このような人について私は誇るだろう。他方で、自分自身については、私は誇らないだろう。(14 行目)

再びガラテヤの信徒への手紙の中で (ガラテヤ 1:11-12)。

兄弟たちよ、私は、私があなたがたに宣べ伝えた福音を示す、すなわちそれを私は人間から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって受けたのだ、と。

この人は、(23 行目) 自分自身の外でのように、第三の天へと、**62 頁** (1 行目) またパラダイスへと、攫われて (Ⅱコリント 12:2 によれば)、そして見てかつ聞いて、そのこと自体を、自分の攫われと使徒職とについて、隠されたことどもの密儀仲間たちに対して、謎めいた仕方でも刻みつけたのである。

そして最後に、極めて幸いなるすべての使徒たちと (12 行目)、救い主たちと、福音を説く者たちと、真理の (14 行目) 預言者たちとは、彼らの各々が、生ける希望が宣教のために当人に啓示されたのに従って [……を] 目にしたのであり、そして、聖霊の子たる将来の者たち、彼 [或いは「聖霊」] の声の感覚を知るであろう者たち、の想起のために、彼ら [使徒たち他の人々] は書いて残してとって **63 頁** (1 行目) 置いたのである。

このような仕方によって、生命の相続と希望とを我々に来たらしめたかの極めて賞賛されるべき使徒 [すなわちマニ] のあとに従うこととは、我々にとっては、信仰の家族であり子孫であるすべての後生の者たち、すなわち霊の人であつて彼の極めて明るい水によって成長する者たち、に対して書いて指摘することであり、(14 行目) それは、彼の攫われと啓示が彼らに知られる

ようになるためである。というのも、おお兄弟たちよ、真理の^{バラクレートス}弁護者の我々へのこの到来によれば、知恵の過剰がどれほどの偉大さであるかを我々は知っているからである。この真理を彼が受け取ったのが**64頁**(1行目)、人々からでもなければ^{ピプロス}諸々の書物を聞くことからでもないということを、我々は告白するのであり、それは我らの父自身[すなわちマニ]がエデッサへと遣わした^{シュングランマ}諸著作の中で言っているとおりである。つまり彼はこのように言っている。(8行目)

真理を、また私が語るえも言われぬことどもを——私のもとにある按手もまた[物語っているように?]——、その真理を私が受け取ったのは、人々からでも諸々の肉の形からでもなく、却ってまた、^{グラフエー}諸々の書物とのつき合いからでもない。そうでなく、極めて幸いなる父、すなわち、私をご自身の恵みの中へと召し、私や他の者たちが世において滅びることを欲しなかった者が、私を目にして憐れみを覚えた時、^{エウゾーイアー}諸々の教義の中から彼のために**65頁**(1行目)選ばれる用意ができていたかの者たちを良き生へと至らせるべく、その時に彼は、自分の恵みによって、真理を知らない大勢の^{シュネドゥリオン}議會から私を引き抜くこともし、自分と彼の父——世界全体の父であり汚れなき方——とのえも言われぬことどもを私に啓示することとしたのである。そして彼は、世界の創建より前にそれらが存在した仕方に応じて、すべての善き業と卑しき業との^{いしづえ}礎がどのように据えられたか、またどのような仕方(19行目)彼らがこれらの時期に、混合に基づく諸々のものを組み立てたか、……そして……、を私に示した。(22行目)

そしてまた再び彼[マニ]は、自分の極めて聖なる**66頁**(1行目)希望の福音の中で書き、そして言った。(4行目)

真理の父なる神の意志による、イエス・キリストの使徒である私マニカイオスが[語る]。この方[すなわち父なる神]から私もまた生じたのであり、この方は生きていて(8行目)、永遠に存続する——すなわち一方で、万物の前から存在し、他方で、万物のあとにも存続する——。そしてすべて生じたものも、生じるであろうものも、彼の強さによって存在

した。つまり彼自身から、私は生成発展したのであり、私が現に在るのも彼の意志に基づく。そして彼から発していかなる真なることも私に啓示されたのであり、そして私がたまさか**在る**のは彼の真理に基づいている。(22行目)彼が啓示した諸々の世代〔或いは「アイオン」〕の真理を私は見た。そして私は**67頁**(1行目)真理を私の仲間たちに示し、平和を福音として平和の子らに**宣**べ伝え、希望を不死なる種族に**宣**べ伝え、(7行目) **選**び〔の民〕を**選**び、そして、この真理に従って上る者たちに、高みへの小道を示した。私は希望を**宣**べ伝え、(12行目)この啓示を啓示し、不死なるこの福音を書き記し、その中に卓越のこの密儀を置き、その中で極めて大いなる業を、卓越の極めて強い業の実に極めて大きな、極めて神聖なるものを、明らかにした。そして私が啓示したこれらのものを、(23行目)生ける者たちに私は、私が**68頁**(1行目)目にした極めて真実なる光景と、私に啓示された極めて栄光ある啓示とに基づいて示したのである。

そしてまた再び彼〔マニ〕は言った、

我が父が私に下賜したすべてのえも言われぬことどもを、諸々の教義からも諸国民からもさらにまた世からも隠し守って、私は、極めて幸いなる我が父の御心に従って、あなたがたに啓示した。そしてもし再び彼が嘉^{よみ}するなら、私はまたもやあなたがたに啓示する。というのも、父から私に下賜された贈り物は極めて大きく極めて豊富だからである。つまり、もし世界全体とすべての人々が**69頁**(1行目)彼に従っていれば、私は、父が私に下賜した益とこの財産自体とに基づいて、彼らを富ませることができ、世界全体に知恵を十分なものとしてもたらすことができるだろうが。(9行目)

再び彼〔マニ〕は言った、

我が父が嘉^{よみ}して私に対して憐憫と配慮の念とを及ぼした時、そこから彼は、極めて堅固なる我が相^{シュジュボス}棒を、すなわち不死の果実全体を、派遣した。(17行目)それは、この者が私を買い受け、かの法の者たちの誤謬から私を贖い出すためである。そして彼は私へと到来して、最良の希望

と不死の 70 頁（1 行目）贖いと真実なる保証と我が父からの按手とを私にもたらした。その者は来て選好して私を選び、私が育てられた際の基準だったかの法の者たちの只中から私を引き出して分離したのである。

非常に多くの横溢、またこれらとほぼ等しい他の横溢は、我らの父の諸々の書物の中にあり、それらは彼の啓示と彼の使徒職の攫われとを示している。実際、我々へと到来した真理の霊である 弁護者^{バラクレートス}によるこの到来のこの横溢は、極めて大いなるものなのである。というのも、71 頁（1 行目）これらについて、何のために、また何ゆえに、この使徒職がそれの諸々の啓示の中で溢れているとひとたび確信している我々にとって、動きがあるのか。そしてこのことのために、我々は、我々の先祖たる父たちから、彼らの各々一人の攫われと啓示とを繰り返してきた——それは、不信仰を身に着けて我らの父 [マニ] のこの啓示と幻とについて悪しきことを考える諸々の思念 [の持ち主たち] のゆえにであり、それは、先祖たる使徒たちの命令もまたこのようなものだったのだ、ということを知ることが出来るのである。（21 行目）つまり、彼らの各々は攫われた時、自分が目にし聞いたことをすべて 72 頁（1 行目）書いて指摘し、その人自身、自分の啓示の証人となったのである。そして彼の弟子たちは彼の使徒職の封印となった。（8 行目）

教師バライエス

そこで我々は、おお兄弟たちよ、我らの父の霊の子なのであって、またこれらを聞き、耳にし、それらを喜びとしているのであるから、霊的な形で彼の臨在 [或いは「再臨」] を知ろうではないか、彼が自分の父の戒めに基ついでどのように遣わされたか、また、身体的にどのような仕方で生まれたか、どのように彼の 73 頁（1 行目）極めて神聖なる相棒^{シュジュゴス}が彼のところに来たか、そして、彼の体が育てられた際の基準である法から彼を分離したかを。というのも、第 25 年に、壮大な仕方で彼に彼 [すなわち相棒^{シュジュゴス}] が啓示されたからである。つまり、彼がまだ洗礼者たちのかの教義の中に在る時に、彼はよその群れの中にいる小羊にほとんど同じだった、或いは、同じ鳴き声でない別の鳥たちと共に過ごしている鳥のようだった。つまりつねに、（17 行目）

その期間全体、彼らのうちの誰も彼を、彼が何者か或いは彼が何を受け取ったか **74 頁**（1 行目）そして彼に何が啓示されたかを知らないまま、彼は知恵と手管とを以て彼らの只中で暮らしていた。むしろこのようにして彼らは彼を自分たちのもとに、身体の名誉に従って、有していたのである。

教師アビエス、そしてザベドの兄弟インナイオス

（8 行目）主は言った、「私が彼らの間に住まっていた時、ガラの息子であり彼らの議会の長老であるシタイオスが或る日、私に対して非常に親愛の情を持っており愛される息子として私を持っているがゆえに、私の手をつかんだ。そこで彼は、他の誰も我々と一緒にいない時に、私の手をつかんで、行って（20 行目）掘り出して、密かにしまっていた **75 頁**（1 行目）極めて大いなる諸々の宝物を私に示した。そして彼は私に向かって言った、「これらの宝物は私のもので、そして私はこれらに対して権威を持っている。今からはこれらは君のものだ。というのも、私がこれら宝物を与えようとしている君のように私が愛している者は他に誰もいないからだ」。彼が私に向かってこのように言ったので、私は賢慮に従って [或いは「思慮の中で」(?)] 言った、「極めて幸いなる我が父が先に私を取り、過ぎ去らない不死の宝物を私に下賜している。それを相続する者は、これに加えて不死の声明を受け取るだろう」。そこで私は長老シタイオスに言った、「私たちより前に **76 頁**（1 行目）これら地上的な宝物を有していた先人たちは、これら宝物を相続した者たちは、どこにいるのでしょうか。つまり、ご覧なさい、彼らは死んで滅び、それらを自分のものとして有さず、それらを自分たちと共に持ち去ることもしませんでした」。 (10 行目)

そして彼は彼に向かって言った、「そこで、これら宝物を有したいかなる人にも誤りや過ちを引き起こしたこれら宝物が私のものとなることは、何のためになるのでしょうか。というのも、神の宝物は極めて偉大な極めて豊かなものであって、それを相続するいかなる者をも生命によって立たせる [或いは「駆り立てる」(?)] のですから」。するとシタイオスは、彼が私に示した宝物の受け取りに対して私の思慮が **77 頁**（1 行目）得心しないのを見て、私に

対して非常に驚いた。

ティモテオス

(4行目) その頃、少しのちになって、私は次のように、すなわち、シタと彼の議会に属するかの者たちとに、極めて幸いなるわが父が私に啓示したことの中から一部を彼らに宣言することを、また、聖性の小道を示すことを、決心した。そしてこれらのことを私が考慮していると、あたかも黒い水で満ちた海かのごとくになった全世界が私に現れた。そして千や万が海へと流れ下り、沈みそして浮き上がり **78 頁** (1行目)、海の四つの地方の周囲に回り込むのを私は見た。(4行目) そして私は、その海の真ん中辺りで非常に背の高い ^{いしづえ}礎 が据えられ、その上にのみ光が上り、その上に道が敷かれており、そして私自身はその道を歩くのを見た。そして私は後ろを振り返って、(13行目) シタが、或る人に掴まれている一人の男を抑えており、そして海と闇の真ん中辺りでひっくり返って沈み、水没するのを見た。彼の髪の毛の短いものだけを私は目にし、その結果私はシタのゆえに非常に悲しんだ。すると、彼を放り投げた **79 頁** (1行目) かの者が私に向かって言った、「何のためにあなたはシタのことで悲しむのか。というのも、彼はあなたの選び [の民] の中におらず、あなたの道の上を歩まないだろうから」。そこでこれらを見て私は、彼に何も啓示しなかった。そしてまた再び私は、私が真理の言葉を語っていた時、彼が私の言葉に反感を持っているのを(繰り返し) 目にした。(13行目)

(以下次回)